

「かにずし？」 大作家・宮脇俊三の 勇み足



函館市医師会

みず せき きよし
水 関 清

陸軍大佐で、後に香川県選出の衆議院議員となった宮脇長吉を父にもち、当時は珍しかった時刻表が身近にある環境で育ち、東大卒業後に就職した中央公論社では、歴史シリーズの刊行など、日本出版史に残る企画に携わったのち、退職。直後から、趣味としていた「鉄道に乗る」ことを、軽妙な文章でつづった、『時刻表2万キロ』や『最長片道切符の旅』などの著作を次々に発表して、「鉄道紀行」を文学のジャンルのひとつにまで高めた、と評されたのが、宮脇俊三（1926～2003）である。

出世作となった『時刻表2万キロ』執筆の主眼は、当時の国鉄の旅客営業路線（20,992.9km）の全線を乗り尽くした、という点にはなく、週末などの自由時間を活用した未乗鉄道線区の乗りつぶしという「趣味」と、会社員としての「仕事」とを、どのようにして両立させたのか、という点に置いたところに特徴がある。これら二つの課題を両立させるうえでカギとなったのが、幼少時から慣れ親しんだ「時刻表」だったのである。

宮脇が国鉄全線完乗を思い立った1975年当時の既乗線区の合計は18,767.6kmで、全線区の90%ほどを乗っていたことになる。完乗へのハードルとなっていた、残る約2,000km・約100線区は全国に分散し、その多くは線区の末端が行き止まりの盲腸線。それらを、1977年までの3年間をかけて乗りつぶした紀行文が『時刻表2万キロ』なのである。

宮脇はこの著作の中で、残存線区をどのように組合せれば仕事と両立でき、旅行費用の面からも合理的なのかという問題を、時刻表を駆使することでどのように解き明かしたのか、という視点から捉え直したうえで、その謎解きのさまを、知的ゲームのような香りを含ませて、持ち前の絶妙な文章力を駆使して表現したことで、鉄道愛好家以外の読者にも広く支持されたのである。

一方で、そのように精緻な計画を立てて旅に出かけても、好きな酒がもとでとんだ失敗をしでかしてしまい、その都度、時刻表を駆使することで乗り切る体験談が織り交ぜられていることも、好感をもって迎えられた。そのような失敗談の舞台となったのが、国鉄瀬棚線の列車が発着する長万部駅である。

瀬棚線は、長万部から二つ目の国縫から分岐して、北海道南部の渡島半島の頸部を横断して西海岸の瀬棚に至る48.8^{キロ}の路線であるが、宮脇はここを1977年5月22日に訪れ、瀬棚駅に19時38分に到着して北海道

の全線完乗を成し遂げている。この時点で未乗線区は、青森県の黒石（くろいし）線・6.2^{キロ}、岩手県の盛（さかり）線・21.5^{キロ}、そして、栃木県の足尾線の末端区間である、足尾～間藤間の1.3^{キロ}にまで減少し、合計で29^{キロ}を残すのみとなった。本来なら祝杯をあげてもよいはずであったが、湧き上がってくるのは寂寥感だったことにとまどった宮脇は、長万部駅で買った日本酒2合を帰りの急行列車の車内で飲んでしまった。これを皮切りに、青函連絡船の待合室で、さらには船内でも飲み重ねて、青森着。黒石線だけはどうか乗車したが、その後の車内で眠り込んでしまい、肝腎の盛線に乗り損ねかねない事態を招いたのである。宮脇一流の機転で、この危機をなんとか脱するまでの一連の行動は、『時刻表2万キロ』の終章近くでの最大の見せ場となっている。

そんな瀬棚線に二度目の乗車をするべく、宮脇が長万部駅に降り立ったのは、1983年2月9日のこと。月刊誌『旅』に連載された「終着駅へ」シリーズ取材のためであった。3番線で待機する11時17分発の瀬棚線列車に乗る前に、駅弁を求めて、11時12分に札幌行の特急が発車する2番線に向かった。その情景は以下のように描かれている。

「横なぐりに吹きつける粉雪のホームに、駅弁屋さんが一人立っていた。品物の上には黒いシートがかぶせられ、それが見る見る白くなっていく。どんな駅弁があるのか、わからないので、シートを開けて見せてもらおうと、「鮭めし」と「かにずし」が三折りずつ重なっていた。」

一読して「鮭めし」は判るが、「かにずし」とは。駅前の「かにめし本舗・かなや」の駅弁なら、「かにめし」のはず。小樽方面への函館線と、苫小牧方面への室蘭線が分岐する長万部駅は、SLが活躍した時代には機関区や車掌区が置かれた鉄道の要衝であり、水や石炭補給のために長時間停車する列車の乗客向けに考案されたのが駅弁であった。なかでも1950年販売開始の「かにめし」は、鍋で煎って風味を高めたカニの身を塩・コショウ・酒で味付け、保存のきく経木の折りに詰めたご飯の上に敷き詰めたもので、今なお存続する人気駅弁である。

長万部駅に降り立つ前後の旅程で食べた駅弁に幻惑されたのかと考えたが、瀬棚線の前の旅は、道東の根室標津と根室。新千歳着の飛行機で道内に入り、札幌から道内夜行に乗り継いで取材後、そのまま札幌経由で長万部着10時7分という旅程で、長万部で駅弁を求めるのが自然である。瀬棚線の後の旅は福島県の日中線。東北新幹線で郡山12時10分着、ここでぬかりなく愛酒家むきの「小原庄助弁当」を買って磐越西線に入り、喜多方発16時10分の熱塩行の列車に乗っている。

鉄道紀行の名手である宮脇俊三が、この駅弁の存在を知らないはずがないのである。